



本町の将来を展望して

鶴田町議会議長 東 哲雄

町民の皆さん新年あけましておめでとうございます。二〇〇二年大きな期待と目標を抱き新年をお迎えのことと心からお慶び申し上げます。

去年は本町議会も一般質問を試行的な取り組みとして、一問一答方式を取り入れ進めています。活潑な政策議論の場になればと思っています。

四月に聖域なき構造改革を掲げて小泉内閣が発足しました。そして今その改革が具体的に進められようとしています。痛みを伴う構造改革、その先にある明るい日本を信じていものです。

また、全世界を驚かせた米国の同時多発テロ事件は、世界の政治経済に大きな影響を与えました。我が国においてもテロ対策特別法に基づく自衛隊の国外協力支援など、戦後六十年がたち、国際社会における日本の対応も大きく変わろうとしています。そして、国内の大きな事件として、BSE（牛海綿状脳症）の発生により畜産を取り巻く状況は大変厳しいものがあり、日本の畜産の根幹を揺るがすものとなりました。未だ風評被

害が続く中、一日も早い回復を願うところです。

一方、本町の重点作物であるイチゴ、新ごぼう、葉たばこ等については着実に実績が出ており、こうした既存の有益な作物を進めていくことが本町農業の活性化につながることを考えます。二年目を迎えた特産品販売所「自慢館」も出荷協議会を中心に生産に取り組む方々の活気を肌で感じているところです。今後町民の生産意欲により所得向上につながる施設として活かしてほしいと思います。

地方分権を受けていよいよ町村合併という当面の問題にさしかかっています。川薩七ヶ町における合併研究会も設立され、その結果報告が急がれるところです。町民がその情報を共有し、そして本町地域の在り方を真剣に考えなければなりません。その選択に向け、今年は大事な年と言えます。町民みんなでいきたいと思います。皆様のご健康とご多幸を心からお祈り申し上げあいさついたします。



奥薩摩、新時代に向けて

鶴田町長 井上 章三

町民の皆さん、輝かしい新年をご家族おそろいで、健やかにお迎える事と存じます。

今年は午年、疾風のように駆け走る馬の力強い運勢と「愛子様誕生」の朗報にあやかり、夢と希望のもてる明るい年にしたいものがあります。

県の主要プロジェクト、奥薩摩・水と緑の郷づくりは、構想の策定作業が着々と進んでおります。同時に鶴田ダムも、国の水源地域活性化の対象ダムとして指定され、水源地ビジョンの計画づくりが進められております。

わが奥薩摩地域は、国県の支援を得て飛躍できる大きなチャンスを迎えていることになります。紫尾区では、区湯改築の準備が始まっておりますが、奥薩摩構想推進の立場から、国県の支援が得られる様、努力してまいります。

空港までのアクセス道路として整備が進められている地域高規格「北薩横断道路」については、関係町で「整備促進期成会」を結成し要望活動を続けてまいりました。今年八月頃には供用開始となる予定の北薩空港道路の六キロ区間に続き、今回、薩摩道路の五キロ区間（永野インターから県道薩摩祁

答院線）が調査区間から整備区間に格上げになりました。いよいよ本町方面に近づいてまいりますので楽しみにです。

さて、わが地域の農業の基幹作物である畜産は、BSE（牛海綿状脳症）により甚大な被害と危機を迎えました。安全性の確保・消費の拡大など、懸命な努力が一日も早く報われるようにと願って止みません。

事業面では、神子地区高嶺の県道改良と河川改修がいよいよ完成を迎えます。また広域農道は、神子のトンネルと浦川内への橋の建設工事が本格化してまいります。

合併問題に関しては、七ヶ町の助役・総務課長・企画課長等を中心に「合併研究会」を設置して、そのメリット・デメリット・財政のシミュレーション等の調査研究がなされております。二月頃には報告書がまとまる予定ですので、町民の皆さんへの速やかな情報提供を図り、町の将来を検討して頂きたいと思っております。

「人がいきいき、まちがキラキラ鶴田の創造」に向けて、今年が実り多い一年となります様、祈りつつ新年の挨拶といたします

今年は午年

人と馬との長いつきあい

「馬には乗ってみる、人には添ってみる」「馬の背をかける」「生馬の目を抜く」…。馬に関する慣用句や諺は数知れません。馬がいかに人と深くかかわってきたかがうかがわれます。

馬が最初に家畜化されたのは、今から五千年ほど前の中央アジアでのこと。以来、人や荷を運んだり、物をひっぱったり、農耕を助けたり、戦場で働いたり、さまざまな場面で大きな役割を果たしてきました。その国や地域に大昔からいる馬を「在来馬」と呼びますが、日本では現在、北海道、長野、宮崎、沖縄などに計八種類がいます。これらの馬の祖先が、いつごろ、どういうルートで日本列島に渡ってきたのかは、まだはっきり分かっていません。しかし、縄文・弥生時代には、役割ははっきりしながら、馬がすでに家畜のように利用されていたようです。古墳時代の遺跡からは馬の埴輪も出土しています。

馬は、古典にもしばしば登場します。最古の歌集といわれる「万葉集」には、馬を詠んだ歌が八十首近くあり、馬が貴重であったことが読み取れます。たとえば、柿本人麻呂の歌。

山科の木幡の山を 馬はあれど
歩ゆ吾が来し 汝を念ひかね

「私には馬があるが、あなたを思う心に耐えかねて、山科の木幡の山道を歩いてきたのです」という恋歌です。人麻呂のように宮廷仕える階級の人々が馬を所有できたことがわかります。

「走る芸術」馬の耳に念仏

馬と聞くと真っ先に競馬を連想される方も多いと思います。馬同士を走り競わせる行事は、走馬、競馬などといって、奈良時代から行われていました。特に端午の節句（五月五日）の競馬は恒例で、ときの天皇が臨観したとの記録が残っています。

現代では、競馬といえばサラブレッド。より速く走るようにと、品種改良を重ねてつくりあげられた馬です。広い胸幅、よく発達した後軀、四百キロを超す体を支える細い脚、たてがみをなびかせて走る姿は、「走る芸術品」といわれるだけあって、ほれぼれとする美しさです。

一方で「馬の耳に念仏」「馬耳東風」と、無反応役立たずの代表のようにいわれる馬の耳。私たちが何気なく使ってしまう諺ですが、これは誤解と考えてよさそうです。

馬の耳は、前方にある物の距離を測るなど優れた機能をもっています。

「馬の耳に念仏」は、悠然とした馬の姿から連想されたものなのでしょうが、馬にとっては迷惑な話ですね。

馬は、人間の願いごとにも関係があります。そう、絵馬です。その昔、神に祈願してかなえられたいとき、神馬とするように馬を献納しました。しかし、貧しい民は馬を納めることができないので、代わりに馬の絵を描いたり、馬の形に作った木片を献じたりしました。それが絵馬の始まりだといわれています。

午年の今年もまた、神社にはたくさんの絵馬が献納されることでしょう。一生を健康に、無事に過ごせますように、そして世界に平和が訪れますようにと、心から願わずにいられません。